

図書館史研究会事務局

会

図書館情報大学 藤野研究室

—— 本号の主な内容 ——

- ・ 第6回図書館史を考える（緑蔭）セミナー（質疑・総括）
----- 奥泉 和久（横浜女子短期大学）
- ・ 機関誌「図書館史研究」第6号発刊のご案内
- ・ 報告事項

第6回図書館史を考える（緑蔭）セミナー（質疑・総括）

第6回のセミナーは、緑蔭セミナーと銘打って昨年9月8日・9日、法政箱根荘で行われた。参加者全員の発表が義務づけられ、自由な討論が展開された。

『図書館史研究』第6号（本年10月刊行）には、その報告の要旨を掲載したが、紙数の関係で質疑・総括の部分の割愛せざるをえなかった。ここに質疑・総括を掲載するが、何分にも長時間にわたる討論のこと、抜粋・要約せざるをえなかった。

したがって、重視すべき発言を省略したり、筆者の曲解もあるかと思う。ご容赦願いたい。

（記録：奥泉和久）

図書館発展の社会的要因

森 耕一

小川：宗教と図書館では、カトリック教徒のことで低所得と農業従事者が結びつくことが多いとあるが、カトリックといった場合に他に特徴的なことがあるか？

森：地域的に農業従事者が多い国とか、あるいはアメリカの国内でみても低所得の方がカトリック。というのはプロテスタントというのはやはりリテラシーを前提とすると思う。例えば、フィリピンも非常にカトリックが強い。それから韓国。戦後の動きを見ても、民主化の一方の旗頭になっているのはカトリック教徒じゃないか……それから開明的な役割、但しその信仰としてはリテラシーが高まるとカトリックでは満足できない。

川崎：ただ、カトリックとプロテスタントだったら、プロテスタントの方が活字を重視するといった一般的な傾向がある。フランクリン……知識とか活字に非常

に積極的になってきた。

石井：本を読む態度の積極性と消極性の違いが、図書館を発展させる要因につながるか？

森：日本の場合、大衆の中に浸透してくるのは割に浄土教とか浄土真宗……これは「ナンマイダ……」と唱えさえすれば成仏する。お経を読みなさいとは一言もしていない、そこがプロテスタント（聖書を読む）とは非常に違う。日本は、読むことにつながらない……儒教ないし仏教が、読書とか図書館ということにどのような影響を与えたのか……

小川：日本の場合、例えば二宮金次郎なら、その人の人格をじかに学んで、つまり文字を媒体にしないで、自分の行動様式としてつくりあげていく。明治から大正にかけて、若干ながら地方のなかでの図書館活動が行われたが……この辺のことも含め、宗教と図書館の関係を課題として考えていく必要がある……

森：江戸時代の後期、大坂商人が相当の力をもつが、彼らの宗派がどうなのか。経済を支える倫理にも関わっていたのではないか。

石井：日本人の読書観。読書をどう捉えたか……

川崎：人口密度は関係ない？ 都市化は関係あるというような……

森：ラウアーは、人口密度は証明できないと言っている。

加藤：2万人以上というのは、何か根拠があるか？

森：ケニオン・レポートに、1927年の段階では……2万人以下の自治体の図書館は独自で支えられないとある。ラウアーはその根拠を書いていないが、ヨーロッパでは都市化とそうでないものの境界線として常識になっているのかもしれない。

宇治郷：リテラシーというのが基本だとは思いますが、日本の場合公共図書館の発展に必ずしも結びついていない。日本の学校教育のあり方が問題。生活のなかに図書館をとりこむという基盤が薄かったのではないか。

森：日本は義務教育が普及していたが、新聞は読むが書物を生活の一部として絶えず読むという人口は以外と少ない。教育についても、明治以降近代化を駆け足で進めた。効率はよかったが、画一的。英米は、小学校の時からプロジェクトをやっている。個性化された教育が日本にはない。

石井：図書館の何をメルクマールとして発達というのか……

森：国際的には、公共図書館については、人口ひとり当たりの貸出冊数。

自由民権運動と縦覧施設

奥泉 和久

川崎：新聞縦覧所というのは、設置主体と利用対象は一致していたか？

奥泉：結社の規模が比較的大きい民権結社は、社員が共同で購入、閲覧していた。

貸出も認めた。小規模な新聞縦覧所のような活動では、民衆を対象とした。

石井：民権結社について言えば、設置主体と利用主体とがある程度一致していた。新聞縦覧所全体でいくといろいろなものがある。

奥泉：結社の規模によって、かなり差があるようだ。

石井：山梨の新聞解話会は、民権を境に変質する。

奥泉：山梨の新聞解話会には、県側の弾圧が厳しかったという記事は随分ある。

加藤：世相的に強烈だった？

奥泉：それはある。内容が政治に関することだとストップさせる。ただ、問題が非常に取り上げられる時期と、地域の問題もある。明治13年の集会条例による規制は一時的なもので、数カ月後また盛んになってきた。それが決定的になるのが、明治15年の集会条例の改正。活動に対して、影響を及ぼした。

石井：前（明治開化期）の新聞縦覧所と同じように見てきたが、もっとその連続性というところまで見る必要はある。

小川：初期の頃の新聞縦覧所は、例えば『官報』とか政府系の新聞を縦覧させ、政府系の思想を普及させるところに大きなポイントがあった。新聞を読めない連中に新聞を読んで聞かせた。そこで「読師」が任命された。……政府の思想を民衆に、解説して聞かせて伝達する。人間的な要素が大変濃厚にあって、政府のイデオロギーの伝わり方が変わってくる。自由民権結社の縦覧所で、小学校の教員を媒体として自由民権思想を庶民に伝達する、そういう役割を持ったものとして位置づけられようとしている。断絶があるんだろうか、連続性があるんだろうか……？ 読み手は変わらざるをえない。「読師」は小学校の先生だけか？

奥泉：初期の頃、小学校の教員……新聞が変質することによって、小学校の教員の役割というものが下降する。その時期は区長とか戸長、行政の末端者の人が代行していた。新聞縦覧所がいろいろなところにあっし、様々な人によって読まれてきた。連続性というものと、それを逆手にとって、その後また小学校の教員が政治的な意図を含めてというような両方の意図が絡まっている。

森：イギリスでいうと1840年代には、新聞。本も少し置いてあって、コーヒーハウスでは読める人が声をあげて読んでいた時期が相当長く続く。ところがイギリスの場合、1824年に結社禁止法が廃止。そのあたりから社会運動、労働運動が盛んになる。当然新聞というのは、これは現在でも違うが、イギリスの場合はいろいろな主張の新聞があった。しかも、コーヒーハウスだけではなく、公立図書館の前身である職工学校が新聞を置き始める。だから、新聞が普及していくのは、日本より40年くらい前。パブリック・ライブラリーができて、そういうものは置く。言論に対する自由度が今ほどでもないけれども、日本とイギリスと比較す

るとやっぱり大分違っているという感じがする。日本は開国して、またこう閉じ込めていく……

山崎延吉の図書館思想—安城農業図書館の活動をめぐって— 加藤 三郎

森：昭和6—7年頃……，開館日数に開きがあるが……7—8年の間に大きく変わっている？

加藤：飛躍している。専任司書がいるか否かによる変化。昭和8年は開館日数が315日。閲覧人員4,543人。

森：祝日も開いた？

加藤：開館していた。すごいバイタリティー。

石井：山崎は設立時に、またその後どの程度関わった？

加藤：図書館経営の面では直接にはない。山崎という人物を通して、安城農業図書館が存在した。きっかけを作ったということ。図書館とか巡回文庫を知って必要性を説いた。それを地元の人が受け入れた。当時の調査を見ても、非常に読書や文化的なものに対する関心が強い。安城がそういう風土にあった。

川崎：館外貸出の制度で保証金3円というのは当時としては？

加藤：結構高い。

馬場：図書館利用できる人は、ある程度制限される？

加藤：だから閲覧人員が4,543人いる。

石井：この頃に「農業図書館論」がある……総合的に見たらおもしろい。農業の専門的な資料を揃えている農業図書館というのは……

加藤：山崎の著作をさぐって行けば何かでてくるのではないかな。非常に先見性があったと思う。

奥泉：教育会から相当数の蔵書を譲り受けているとあるが？

加藤：具体的には不明だが、愛知県の場合こういうケースが多い。

森：安城は場所としては？ 濃尾平野の中心……

加藤：日本のデンマークと言われている。地理的な条件は非常にいい。明治用水が引かれ、農業が非常に盛んなところ……野菜、養鶏と多角経営。

小川：商業もかなり発達していた？

加藤：今は工場も……かつては農業協会というのがあって、夏季大学が開設されたりした。農村教育に力をいれていた。

雑誌「キング」を中心に

小川 徹

工藤：編集者にはどういう人がいたか？ 「キング」が音読から黙読への転機に

あったということと軍国主義への傾斜との関係。購入者層の問題は？

小川：「キング」は野間の強力な人格を反映したもの。雑誌の編集については、野間は特定の編集者の個性を前面に出さないという方針。国民をどういうふうに動員して戦争へもっていったかは大きなテーマ。民衆の中にも自ら戦争へ傾斜していく気持ちもあったのではないか。そこに雑誌とか本、学校教育、隣組などがどういった役割を果たしたか、総合的に考えなければならない。「キング」についていえば、立身出世、天皇崇拜主義があることはあきらか。ただ、戦争を賛美するような小説を載せる時期は遅い。購入者層の問題については、永峰さんが読者欄をとおして分析しているが、……読者欄の分析については、一定の限定のもとで考えなければならないのではないか。

馬場：販売部数と読者層……当時貸本屋があったのか？ または、図書館にこういったものを置いていたのか？ 図書館で購入することはできた？

森：図書館は数からいって影響力をもっていなかったと思う。購入は……

小川：青年団は買っている……

石井：ある時期から。官製の青年団は買わない。自主的になってから。こうしたものが入っているかどうかで青年団のひとつの目安になる。

森：図書館にはあまりなかったのでは……図書館をとおしてということは非常に少なかった……

馬場：入手方法としては購入？ 百万部が？

森：回し読みがあった。

石井：「キング」の中に図書館論はある？

小川：ない。立身出世は山のようにあるが。

私立大橋図書館の戦時中の活動

石井 敦

加藤：大橋図書館の職員数は？

石井：出納手はかなりいた。20人くらい。それを除くと20人くらい。

加藤：資料収集の選択制度はどうだった？ 利用は？

石井：館員に選書させて、最終的に竹内の意向で購入した。報告書のようなものまで積極的に集めていた。それを図書館報「トピック」で紹介した。どういう人が使ったかは……

森：「トピック」と歴史的な事件を照合すると、それぞれが非常にタイムリーな取り上げ方をしている（中略）……19号に“機械工作法”があるが、当時日本は工作機械が作れなかった。いずれ行き詰まることははっきりしていた。工作機械はドイツから輸入していた。

石井：「科学的栄養学関係」を2回掲載しているが、これも切符制や配給制度の開始と一致する。相当この時代としたら、（先が）見えていた……

加藤：日本の敗戦も読んでいたかもしれない。

石井：「国体の本義」なんかは無視している。その頃の県立の「図書館報」を見たらそういうのばかり。

小川：経営のファンド……財政的な面、組織は？

石井：財政的な面は、竹内が任されていた……大橋図書館の出納手仲間を含めた旧職員が「雑木林」という雑誌を出している。当時を懐かしんで今でも集まっている……重要な役割をしていた。

中井正一の市民精神－非連続の連続－

馬場 俊明

森：意見が2つある。戦争と図書館の関係は、英米と日本とでは違うと思う。戦争中の協力態勢だが、英米の場合、兵隊は戦地でも本が世みたい。だから、祖国から本を送る。それによって図書館が必要だと分かる。日本はインテリがせいぜい文庫本一冊。日本は、総動員の機会に出版の統制とか、戦争協力をするが、体制側は（図書館）を高くかってもいい。第2点、出身地（田舎）に帰省するような習慣は日本的……？ 母親的な何かにつながるようだ。

馬場：中井がなぜ図書館なのか。尾道に帰らなかったら、図書館に勤めていたかどうか分からない。彼の節目のところに母親がいた。中井は、論理的だが「情」の人間。市民主義的な哲学を支えていたのが、母親を中心とする「家」の思想ではなかったか。直接図書館云々とは関係ない。

宇治郷：中井は、図書館の場で彼の思想をどう生かそうとしていたか分からないが、金森の強烈な個性、岡田温とかの陰で中井の思想が不発に終わったというような感じがする。

森：中井は戦前の哲学者、美学者……国会図書館というのは、沢山のベテランが集まっていた。その中での副館長。図書館の経験は尾道しかない。

加藤：筆が立つということと実践は違う？ 強烈な個性が……偶像化されて……

馬場：中井の市民的な立場の発想というのを図書館界は生かしきれなかったのではないか。

石井：まだあの時期、国会図書館の構想は誰も打ち出せなかった……いかに中井としても。「委員会の論理」と実践の間が開きすぎている。馬場さん、その間を埋めようと努力されているが。

馬場：歴史というのは……仮説を立ててそれに基づいて資料を読んでいく。解釈の多義性というのがある。中井も「われらが信念」で評価がガラッと変わった。

宇治郷：中井の市民的な発想というのはあったと思うが、図書館の場で何らかの仕事を構想しそれに生かしたというのではない。実践したのは他の人……

馬場：その発想というのは、中井が発想したのではないか。彼は文章で書いている。文章だけで、実際は国会図書館の別の方からの発想であったのか？

宇治郷：反映はしていると思うが、それを実証的に裏づけるものはない。

李朝時代（1392-1910）の図書館

宇治郷 毅

加藤：朝鮮本は、重要文化財になっているもの、国宝にしていいくらい。

宇治郷：向こうでは国宝になっている。

石井：中国本と朝鮮本の区別は、すぐつく？

宇治郷：わかるようだ。紙質と綴じ方で。

小川：東洋文庫にもある？

宇治郷：あるようだ。静嘉堂にはあると言われている。ただ、図書館なり文庫なりの調査研究がほとんどふれられていない。避けられている。私は、日本人の立場で持ってきたものは持ってきたものとして、その実態をはっきりさせる必要があると考えている。向こうの人は論文などで批判はしているが、返せとかそういうことは言っていない。『図書館雑誌』に載った論文でも、最後のところで「数百年を日本で過ごした朝鮮本を思うと複雑な思いにかられるが、世界のどこにせよわが国の典籍が生き残り息づいているなら、それはまさに人類の発展に貢献する図書の使命として幸いなことであろう」と書いている。……東大では関東大震災で50-60万冊焼けたと言われているが、その中に朝鮮本も含まれていた。

工藤：関東大震災で焼けた「焼失目録」というのは、10年後ぐらいに「私学雑誌」に載った。その後「図書館の窓」に出したこともある。それから東大の朝鮮本については、F氏が調査した。その時、東洋文庫、東洋文化研究所の図書も全部調べた……

中国目録学における六朝時代

工藤 一郎

宇治郷：こうした目録については、その内容がわかった上で分類、変遷というのが考えられるのか？

工藤：内容については、例えば阮孝緒の「七録」の中に470年の王儉の「七志」の分類、巻数が述べられている。このように、後代の目録が、底本とした目録の内容について述べている。

小川：「晋元帝書目」が3,000巻程収録している。……百数十年の後に23,000巻を収録する目録ができたとあるが……関連性はあるか

工藤：内容は分からない。中国の目録の基本的な考え方は、所蔵しているもの。明代になってから……（目録の細部の説明にわたるため、以下略）

大学中央図書館における学部学生のサービス

阪田 蓉子

加藤：館外貸出、開架は、図書館にとっては画期的なことであった。各大学図書館でのきっかけは？ 公共図書館では、あそこの図書館がやっているからここでもやろう……開架の問題では、増改築の時に採用するとか。特に歴史と伝統のある大学ではどうなのか？

阪田：記録としてなかなか出てこない。何年から始まったというのが見られる程度。当時の館員の記憶にありそうなのだが……

森：京大の場合、事務部の考え方で決まるようだ。それと、新築、増改築がチャンスになる。京大も新館ができてから開架冊数が増えた。

川崎：明治時代の大学図書館というのは、開館していたのは週に1日とか2日？

阪田：当然毎日と考えていた。

馬場：この「保認証」というのはどういう意味なのか？

阪田：今の保証書。担当教官が、いまこういうことを調べているからこの本を貸し出すように、というように、ごく限られたもの。今でも東大の場合、学部単位で教官の保証を必要とする。

石井：キリスト教関係の大学は、ずっと早くから始めていた。

阪田：立教、上智は戦前から。立教は確か英国人の方が図書館長で、その方の方針で貸出、開架が進んでいた。それから70年代の学生運動による変化はない。また、公共図書館のサービスの改善も大学には影響を及ぼしてはいないようだ。

石井：今、2冊2週間になったのは、やはり公共図書館の影響だろう。

馬場：貸出との関係で、ペナルティのことは？

阪田：罰金はほとんどない。だいたい貸出停止。それから、中小の図書館は開架率がいいが、大規模なところはいろいろな問題があって難しいようだ。

「河井弘志氏『アメリカにおける図書選択論史の学説的研究』（JLA, 1987）

についての検討」

川崎 良孝

森：今の発表を要約すると、河井は選択論だけ見ていて、デュイの図書館に対する哲学というようなものを見ていない。それと、デュイについては河井はハリスなどの修正解釈に頼りすぎた。修正解釈そのものがデュイについては間違っているというのが川崎の解釈……デュイが能率主義者というのはいただけない。

河井：私は、そういう要素は今でもあると思う。

森：それは、それ一点張りじゃなく、心底には図書館員の使命とか、図書館は何をすべきかということがあってのものだと思う。

川崎：デュイの論文にはその熱意みたいのが（うかがわれ）、単に効率だけではない。

河井：ただ、選択論ということで彼が論じたときに、何でああ機械的な書き方をしたか、わからない。大きなファクターとしては、当時まだ選択権がどこの図書館でも確立されているという状態ではなかったからか。

森：デュイは「ライブラリー・ノート」で図書館の目的をはっきり書いている。

石井：図書館思想と選択論というのが整合性をもつことができないのではないか、という気がする。それは2つの点で。ひとつは、例えば仕事をしていく上で選択論はあるが、現実には図書館が動いていく中で違ったものになったり、緩めたりせざるをえなくなる。もうひとつは、10年、20年やるうちに初期の選択論とに差異が生じる。

河井：それはある。デュイの場合でも、76年の時点と80、90年とは大分変わってきているのではないか。

森：僕は、デュイの場合、図書館観についてはそんなに大きく動揺はしていないと思う。

川崎：デュイは一貫していたような気がする。

石井：選択の原則は持つが、現実には様々な本がある。動いていて、それでいつの間にか変わっていくという……難しさがある。

総括

司会：森 耕一

まず、テーマについての提案を求めた。森氏の発表について、議論を続けたいとの意見が出た。

石井：図書館「発展」の要因に、民主化度を考えている。国によって状態が違うが……近代化、都市化……結局、経済的な基盤というようなことが複合的に絡んでくる。より根本的な要因は何か？

森：今との関連で……この論文の本当の狙いは、日野が非常に画期的な成功をおさめたが、それはまさしく日野が近郊農村から都市化され始めたことによって、人口構成という受け皿ができ、成功したのではないか。あれは供給が需要を作った例だが、需要を生み出す素地があった、ということデータを的に証明したいと思ったから。

石井：例えば、前川君がいて有山さんがいて、ある程度の予算があって、それを他

の町や村でそのままやったら……

森：必ずしも成功していない。

加藤：確かに言える。名古屋でも15の分館があるが、東高西低ということが言われている。住民の意識など、図書館の日常の活動の中に感じられるかどうか。

森：補足だが、前川君と話したとき、図書館に食いついてきたのはホワイトカラーとブルーカラー、といっても工場労働者。自営業は寄ってこない。労働時間が長い。8時頃までお店を開いている。

加藤：実際には、自営業の人もお店が休みの日に利用している。まさに、利用者を知ること。各層にわたっている。

森：ただ、あらゆる階層、職業の人が来るが、例えば図書館の登録者の中では、農業従事者の割合はより低くなるのではないかとかが問題。

石井：森さんの話でおかしいと思ったのは、前川君はとブルーカラーは来ないと言った……

加藤：でも、親は利用しなくても、子供は利用する。

石井：来ない。子供と親の関係はかなりある。

森：その場合、何を置いているかが関係する。本の内容、雑誌とか……

石井：図書館の発展の捉え方……

森：貸出密度ではかったのは、国際比較だから。一国内のある地域について考える場合は、もう少し指標を増やすべき。……置戸は本館と移動戸1台で頑張ろうといっても巡回時間が大分違う。そのあたりの工夫があった。

石井：原則的な、中小レポートなりの考え方を適用した。前川君も向こうへ行ったら……

森：今、滋賀県下でもN館長がBMをやりたい。それで予算要求しているが、通らない。前川君は、果たしてY市でBMがうまくいくだろうか、と見ている。彼は、日野でBMから始めたのは、日野のあの時期のあの土地柄だから成功したとみている。BMから始めるということは一般化できないとしている。

石井：可能性のあるところは、分館からでもいい。

森：それから、（以前と）要求が違ってきている。日野の時は2,000から3,000積んでる車でよかったが、今は図書館がある町というのを知っている人間がいるから。何千冊、2週間に一度では我慢できない。市民要求が高まっている。

石井：そういう点もある。住民を知っているか知らないかで……森先生がいま日野のケースを出して言おうとしたことは、都市化とかそういう条件がやはり絶対的なものと言おうとしたわけですね。

森：そう。

川崎：都市化というのは、アメリカを見ていると2つの面から見ないといけない。工場町などは案外早く作る。労働者もある程度の知識が必要ということで、水道や交通網などと同様に一貫して考える。ボストンを見てもわかるように、町全体の経済的な発展が非常に大きな要素となる。逆に、村とか小さな町では人々を引き留めておくために図書館を作る。そういう両方の動きがあったようだ。

石井：日本の図書館を見てきたときに、その指標というのは資料費だが、戦前の昭和の初めぐらいまでの資料費の高いところは、弘前、松本、会津若松といった城下町。そういう点で、都市との関係というか、古い意識というか、宗教と関係ないかもしれないが、士族というか……ところが（昭和）30年代になると太平洋岸ベルト地帯、東海道線の……

森：それは神戸ぐらいで止まる。

石井：まさに産業化、工業化。30年代からは、いま、川崎さんの言ったとおり。現在やってみたらどうか。大都市周辺に……

森：そこで、次に移りたいが……現代の状況だが、県の設置率で愛知県は割に高くなっている。大阪府は上下あるが、滋賀県が伸びてきている。私が言いたいのは、昨日話題になったが、人口20万ぐらいまでの都市の方が一度できるとぐっと伸びる。むしろ、30万、40万というところがもたもたしたり……実は私の住んでいるあたりがそうで、私の街が人口35万、隣の茨木が25万ぐらい……高槻は2館できたけれど35万では足りない。枚方は35万から40万近いが8館ぐらいある。教育委員会にシャンとした人がいる。中都市でぐっとよくなっているところは行政がしっかりしている。数年間じゃなしに15年ぐらいかけて……で、20万までの都市の方が水準が上がりやすい。滋賀県がその典型。大津を別格にすると、20万を切っている。それぐらいだと本館とBMぐらいでぐっとよくなる。

加藤：地縁関係、人と土地との関係というか、人と横の連絡がとれてうまくいく。

石井：僕はそこのところ、2つ考えている。ひとつは図書館の問題。館長、それに館員の戦略的なもの。もうひとつは社会構造。同じ20万といっても産業が停滞しているところもある、というように中身によってかなり違う。

加藤：街の勢い、というのはある。人口構成をみて、30歳、40歳代が多いところは伸びる。職員の問題、館長の問題もある。

石井：戦略的なことは、十年一日の如くやっていたのでは駄目。貸出を伸ばすとか、行政との接触、説得の仕方とかは館長の力で随分違って来る。安住すると停滞する。

河井：館長の力？ それとも職員？

石井：もちろん根本的には職員。

河井：僕はそっちだと思う。町田と日野を比べた場合、町田は行政職。

石井：アンテナ張っているのは職員だから。地域のいろいろな要求を捉えるか、捉えないかで……

加藤：私は、職員の平均年齢も考えてみた。若ければ活気があって伸びるのではないかと。

石井：森先生にお尋ねしたい。今度学会で発表されるが、財政力という点。同じ財政力を持ちながら相当の差が出てくる。

森：僕は局所的にしか見ていないが、例えば財政力指数とそれと図書館とは無縁だ。課長の努力なり、住民の突き上げの方が余程大きい。財政の悪いところで、松原なんか市の中で下から数えた方が早かった。

石井：そうすると、経済的な基盤というのは問題にならない……ただ、産業構造というのとは違う。第1次産業か、第2次か、第3次かで……

加藤：それと、利用者の要求に対する職員の意識。

石井：どんなに停滞しているところでも新鮮な本。資料費があれば……

森：買い方もあるけど。資料費。

阪田：ちょっと観点が違うが、相談業務がどうなっているのか。というのは、日野は当初、貸出率だけではなく、相談業務が重要だということは言われていたようだ。僅かに見聞しただけだが、私の経験では職員の方が多忙で、県立、府立の図書館を除いては、あまり相談業務に力を入れていない。入れる力がないのかと感じる。

森：その原因は、基本的には人員不足でしょう。私は、新館の計画のときに必ず言う。レファレンス・デスクとメイン・カウンターは別のところに作りなさい、と。だが、人員不足だといって、入口近くにメイン・カウンターを大きくしてその一角でやっている。それが目立たない。レファレンスの周知度は、われわれの調査の結果で5-6割？

川崎：もっと低い。名古屋では、リクエストが6割、レファレンスは2割。

森：しかも、利用したのはその半分ぐらい……いま、公立のことを論じているが。確かにさっぱり変わらないところもあるが、“ああ、うちでもやろう”ということで、わりと伝播していく。たとえば、公立はビニールのジャケットを外さない。ところが、それだけのことで、僕の知っている限り、大学ではやっていない。大学図書館にもいろいろ問題はあるだろうが、運動としてあるひとつの方向へ流れて行かない。大学の自治ということがあるにしても、職員はそれを超えて何かできないか。

石井：公共図書館と大学図書館の発展というのは関連があるのか。アメリカなんかはALAが中心になっていた……日本は、ことに戦前は、7帝大が何から何まで別個で来た。唯我独尊。

森：要するに、影響関係が……

阪田：アメリカの場合、ひとつ私が見たのは、図書館（間の人）の移動が頻繁です。ニューヨーク公共図書館の人が大学図書館に行ったりとか。

森：しかし、それは最近でもそうですか？

阪田：最近の例で。ですから、そういう事が図書館を活発化させる。

川崎：ウィンザーはボストン（公共図書館）の館長からハーバード大学図書館に行った。

森：パトナムがボストンからLCに行く。

石井：一貫するものがある。……日本にとっては、随分マイナスになっている。本のビニールカバーでも公共図書館でやるから大学図書館ではやらないといった変な、一段上だっている考えがある……

川崎：石井さん，“大学図書館員の方が上”って言った？ それは、アメリカの方がはっきりしている。大学の方が給料も高いし、意識というか……公共図書館よりも大学図書館の方へ行きたがる人が結構いる。男性の比率は、大学図書館の方が高い。館種別に、大学、公共、専門、……学校図書館が一番下だと、男女の比率でそういうことを言う人もいる。

河井：教員もそういう傾向がある。小学校の先生がどんどん女性になって……

森：話が弾んでいます、このあたりで。どうも有り難うございました。

『図書館史研究』第6号講読のお願い！！

本会機関誌『図書館史研究』第6号が先般刊行されました。定価¥1,450 のところ、会員には¥1,100（送料込みで¥1,310）の特別価格にて販売されます。この機関誌の刊行維持のためにも、本会会員はもとより、この際図書館でもご購入頂ければ幸いです。

発売元の日外アソシエーツよりの案内を同封致しました。綴じ込みの振替用紙をご利用ください。

報 告 事 項

1. 「第7回図書館史を考える名古屋セミナー」開催さる

さる8月30日・31日の両日、名古屋観光会館において、会員19名の参加を得

て、標記セミナーが開催されました（詳細は90年度の本会機関誌『図書館史研究』第7号に掲載の予定）。

(1) 第1日（8月30日）には、

石山 洋先生（国立国会図書館）より「国立図書館史」という標題でわが国の国立図書館史における時代区分を中心とした報告；石井 敦先生（東洋大学）より「公共図書館史」と題し、公共図書館史研究の類型と先生自身の経験をふまえた公共図書館史研究をすすめる上での要諦等が話され；石井敬三先生（大阪府立中之島図書館）からは「専門図書館史」ということで現在大阪府立図書館の所蔵する大原文庫について興味深い報告がなされました。

(2) 第2日（8月31日）には、

天満隆之輔先生より具体的な「人物研究」の例として、ガブリエル・ノーデに関する報告；岡谷 大先生（東京農工大学図書館）からピアス・バトラーの『図書館学研究序説』のフルテキスト・データベースを用いての「図書館史理論」研究の可能性についての報告がなされました。

岩猿敏生先生（関西大学）が2日にわたる報告・討論を振りかえられ、本セミナーの成果の上にさらに同一のテーマで検討を深める必要があることを指摘されました。

2. 会員異動

新入会員

退会者

第8回 図書館史を考えるセミナー

「緑蔭セミナー」のご案内

今年もまたリベラルな雰囲気「緑蔭セミナー」を開催することになりました。一昨年の箱根の緑蔭セミナーですでに実績がありますように、このセミナーは、構えはごく気楽ですが、各人が日頃研究していることを、そのまま報告しますので、内容はたいへん充実しています。また、時間がタツプリとれますので、心ゆくまで討論できます。どうぞご参加ください。

- ・ 日 時…1990年9月1日(土) 午後1時から
2日(日) 午後4時まで
- ・ 場 所…大東文化会館 〒175 東京都板橋区徳丸2-4-21
東武東上線 東武練馬駅下車 徒歩3分
- ・ 定 員…参加定員30名 (宿泊定員14～15名)
近い人は、夜は宿泊しないで自宅に帰宅することもできます。
- ・ 諸費用…参加費 1,000円 宿泊費 2,000円 簡単な夕食・懇親会費 2,000円
翌日の朝食が必要な場合 500円
- ・ テーマ…特定しません。出席者が現在研究しているテーマについて、約20分間報告し、質疑・討論します。配布する資料は、出席者の数だけ自分でコピーして持参してください。
報告しないで、聴くだけ、喋るだけの人も、あらかじめ申し込んで下されば、参加することができます。(但し、先着順に、総定員30名のワクの範囲内で受け付けます)
- ・ 申 込…参加希望者はハガキに ①報告テーマ と ②宿泊希望の有無、
③翌日朝食希望の有無、④夕食・懇親会参加希望の有無 を簡単に記入して、下記あてにお申し込みください。
〔報告しない人は、①参加する旨、②宿泊希望の有無、③翌日朝食希望の有無、④夕食・懇親会参加希望の有無 だけを記入してください。〕
- * 申込締切… 1990年6月12日(火) (必着)
- * 申込先…… 〒300-15 茨城県北相馬郡藤代町谷中417-79 河井弘志
(Tel 0297-83-3174)

参加申込者には、後日、プログラム、会場案内図などをお送りします。

研究委員会 委員長 石井 敦 同委員 河井弘志